



ラグジュアリーの羅針盤

COMPASS OF LUXURY

手作業を必要とし、重く、繊細で、効率という物差しではおおよそ成立しません。時代の逆を行っています。「そこに最大限エネルギーをかけていく行為が、クチュールの現在地であり、これからのラグジュアリーとは何かという問いへの私なりの答えです」と、彼は静かに話します。

彼はこの衣服を「繊細な鎧」と呼びます。純金やプラチナの釉薬をあえて纏わせ、戦争のニュースが絶えない時代に、割れやすく壊れやすい鎧として男性に着せたい——それは有害な男性性へのアンチテーゼであり、世界のリーダーたちへの鋭い問いかけでもあります。

中里唯馬さんは、パリ・ファッションウィークの公式スケジュールに招待されている唯一の日本人ゲストデザイナーです。その彼が、2026年春夏パリオートクチュールコレクションで、陶器を用いてオートクチュールを作りました。割れる。重い。着るものではない。しかしそれぞれが、問いかけの核心なのです。

衣服の大量生産が加速するいま、デザインはどこへ向かっているでしょうか。経済合理性、機能性、快適性。その方向に最適化され続けた先に、いったい何が残るのでしょうか。

中里さんの陶器の服は、気の遠くなるような

土を纏う 陶器のオートクチュール

インスピレーションの源は、鹿児島・屋久島でした。月明かりの下、川が気の遠くなる時間をかけて削り出した流線形の石と、数千年を生きる屋久杉の年輪に触れたとき、それを自らの手で模倣したいという感情が芽生えました。その後の6カ月間、中里さん自身が1500時間以上を粘土作業に費やし、数千個のパーツを作り続けました。やがて指が土の動きを覚え、流線形の造形が自然と手から現れてくる——それは、途方もなく長い時間の流れの中に自ら

が溶け込んでいく体験そのものだったと言います。土から衣服を生むという行為は、人間の記憶の深いところに触れます。泥を体に塗ることが衣服の起源という説があり、ビーズの装飾から土偶・土器へと続く儀礼の歴史があります。大地と身体の関係

を重んじる日本の舞踏もまた、同じ感覚の系譜に深く連なります。彼の作品は、そうした人類に通底する身体記憶を呼び覚ますかのようです。

このショーに、音楽はありません。ヘッドホンで電子音を聴き、液晶の光に囲まれた日常を生きる私たちに向けて、中里さんは問いを差し出します。身体の動きに合わせて陶のパーツが触れ合い、かすかな響きを立てる。その音は、もしかすると、土という物質が地球に現れた遙かな時間の記憶を呼び覚ます、大地そのものの声ではないかと。

どれだけ効率よく、どれだけ多くの人に届けるか。その問いが産業の中心を占め続けているいま、まったく逆の問いに全力で向き合うこと。それがクチュールにしかできない仕事であり、ラグジュアリーの真価もそこにあると、彼の作品は告げています。土は、何千年もの昔から、人の手と身体を知っていました。私たちはみな、いつかこの土に還る。中里唯馬さんは、その長く深い記憶をそっと呼び起こし、現代を生きる人の肌へと、やわらかく纏わせます。

中野香織



富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆・教育・企業アドバイザーに携わる。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。最新刊『「イノベーター」で読むアパレル全史増補改訂版』（日本実業出版社）。「エレガンス入門」（ちくまプリマー新書）近日発売予定。



上) 屋久島で陶器を作り続けるクチュールデザイナー(写真提供:中里唯馬さん)
中・下) 1月末のパリ・ファッションウィーク公式スケジュールで発表されたYUIMA NAKAZATO 2026 春夏コレクション ©MIKA INOUE